The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	誼卿武内義雄先生の學問
Author(s)	金谷, 治
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 73-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90423
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

誼卿武内義雄先生の學問

金谷治

武内先生、名は義雄、字は誼卿、述庵と號された。伊勢の小古曾の人である。家は眞宗高田派の寺院であった。笈を負うて上洛され、第三高等學校をへて明治四十三年七月に京都帝國大學文科大學支那哲學史の業を畢えられた。大學の指導教授は主としては君山狩野直喜博士であり、博士の「清朝學術沿革史」の講義はとりわけて先生に深い感銘を與えた。いうまでもなく、狩野博士は清朝考證學をわが學界に輸入した代表的な學者である。その講義がすばらしかったのも當然であろう。講義に啓發された先生は、やがて閻若璩の『尚書古文疏證』を讀み、その考證の正確と引證の該博とにいたく感動された。先生の生涯の進路はここに定まったというべきである。先生の學問の中心は、やはり清朝の考證學にあった。

大學卒業後しばらくのあいだを、先生は郷里にかえって御祖母の湯藥に侍し、その後あらためて勉學の志をとげるために、大阪府立圖書館に勤務された。ここで先生は西村天囚氏の知遇をうけ、その主催する文會景社に入って浪速の諸老先輩との交誼を持つことになる。もちろん京都大學の關係者、とりわけて內藤湖南博士の教えをうけること多く、先生の交友は廣まり文章の上達と共に學問も深められた。天囚先生が尊敬されたのは桐城派の古文である。その派の代表者姚姬傳に、義理・考据・文章の三者を重んずる說があるのをうけて、天囚先生は學問の具備すべき要件としてそれを尊重された。誼卿先生もまたその影響をうけられたことはいうまでもない。義理とは學問をささえる思想精神であり、考据とは研究の實證的方法であり、文章とはその表現の手段である。この三者がばらばらなものでな

く、一貫した共通の性格において結合されている必要があった。

さて、懐德堂との關係が生まれたのはもちろんこの間のことであるが、大正八年の春、先生は懐德堂から派遣されて中國へ留學することとなった。これは天囚先生の強い推薦と湖南博士の特別なはからいとの賜物である。中國では北京に寓居して新知識の吸收につとめられたが、また華北華中にわたってひろく各地を歩かれた。戰國時代の齊の國都であった臨淄をわざわざ訪ねられたことや、老子道德經の唐碑を求めて旅行されたことなどは、とりわけて先生遊學中の特徵的な事行である。臨淄は今こそとるに足りない邊鄙な田舍町にすぎないが、當時は人口數十萬と考えられる繁華さで、いわゆる諸子百家の人々が集まった大都會であった。先生はここに往時を偲ぼうとされたのである。また道德經の碑石についてはかねて魏稼孫の績語堂碑錄などによってその存在を知り、この機會にその拓本を得ようとされたもので、かねてから進めてきた老子研究を助けるものであった。

大正十年の初めに中國から歸った先生は懐德堂講師として專任され、かたわら大阪高等學校・龍谷大學などにも講席を持たれ、研究生活はまたいよいよ充實した。ちようど前年には京都大學支那學會で雜誌「支那學」が創刊されていたが、先生はその第二卷に八篇の論文をひきつづいて發展するという目ざましい活躍ぶりを示された。「曲禮考」「桓譚新論」「孫子の作者」「釋道安」「中庸」等々である。しかし、あたかも東北帝國大學に法文學部が創設されることになり、先生は招かれて仙臺に赴任することになる。大正十二年五月のこと、先生の齡三十七歲の時であった。そして、以後、東北大學教授の職は昭和二十一年の春までつづいた。

先生の學問修業はもちろん生涯をかけてつづけられた。しかし、大阪時代までは眞に純粹な意味での修業時代だといえる。それに對して、仙臺に移られてからはむしろその蘊蓄を傾けた活躍時代だといえるであろう。研究上の立場は次第に確立され、學界の指導的地位にあって教育に當たられたが、また草創期にある學部の問題をはじめとして大學全般の經營にも手腕を發揮された。『老子原始』の出版は大正十五年。それによって京都大學で文學博士の學位を

得られたのは昭和三年である。それから『老子の研究』『老子と莊子』『諸子概說』『支那思想史』『論語の研究』『易と中庸の研究』などの著書、『論語』『孟子』『老子』その他の岩波文庫の校定譯注、そして五十餘篇及ぶ論文の大部分が陸續と發表されたのは、すべて仙臺でのことである。それらは武內學ともよぶべき特色ある學風を樹立し、國の內外から高く評價されるところとなった。また大學行政のうえでは、着任された翌年に早くも附屬圖書館長として起用され、從來の理科系圖書館と新設の文科系國書館との統合や、文科系圖書費の借財の整理という困難な事業をみごとに果たされたが、その後ひきつづいて法文學部長・學生課長などを歷任され、昭和初年の困難な時局の中で大學のために盡瘁された。今日までつづいている東北大學の雜誌、「文化」が創刊されたのは、先生の學部長時代のことである。

さて、昭和二十一年、皇太子殿下の御敎育のために先生は東京に移られた。終戰直後の東京での新生活はなかなかきびしいものであったに相違ない。三年の後、鄕里の伊勢に歸られたが、翌二十五年からおりから新設されたばかりの名古屋大學文學部のためにまた講師として出向されることになった。數年にしてそれを辭退されると、漸やく自適の生活に入られた。先生はそのすぐれた業蹟によってすでに昭和十七年から帝國學士院の會員に選定されていたが、退隱後の昭和三十五年に文化功勞者に選ばれ、名譽ある功勞賞を授けられた。四十一年六月、ついに不歸の客となる。齡八十に數日を缺いた。

先生はわが中國哲學界に一期を畫する大きな足跡を殘された。その學問はさきにも述べたように淸朝考證學を出發點とし、また中心としている。最も狹い意味では閻若璩の尙書研究を模範としたともいえる。しかし、先生の學問はそうした方法をそのまま驅使して日本の學界で活躍したという、ただそれだけのことではない。それは原典批判を主とした思想史研究法として新しい獨特の意味を持つものであった。

先生の學問はまず何よりも原典を忠實に讀むことから出發する。それはあらゆる古典研究ないし歷史研究にとって

極めて自明のことであるが、先生のばあいそれは特に嚴格であった。「讀む」ということの意味がそもそもふつうの意味での「讀む」ではなかった。それについて、先生はいつも王引之の舌人の意識を高く評價しておられた。「夫れ三代の語言と今の語言とは燕と越との相語るが如し。吾れの小學を治むるや、吾れこれが舌人となるなり。」というのが、墓誌銘に引かれた王引之自身のことばである。古典語という特別な領域を考えたうえで、その難解を克服するために自ら通譯を志願した彼は、「吾れの經を治むるや、大道においては敢えて承けず、ただ小學を好むのみ」とさえ言いきって、ひたすら舌人としての使命感に生きた。小學すなわち訓詁學は古典を讀むための必須の要件である。それを忽せにして正しい讀解はありえない。先生は段玉裁の『說文解字注』、王念孫の『廣雅疏證』、王引之の『經傳釋詞』などの業績を自家藥籠中のものとしてすこぶる推重された。

しかし、古典を正しく讀むためには訓詁の力だけでは十分でない。古典、とりわけて久しい間を筆寫で傳承されてきたものには、當然傳承の間の誤りがある。それをできるだけ訂す用意がなくてはならない。それには何よりも徹底した校勘學の方法が必要であった。いうまでもなく、中國の古典についての校勘は、わが享保年間に山井鼎によって先鞭がつけられ、中國でもそれをうけた阮元らをはじめとして活潑に行なわれてきた。先生の校勘學もまた先生のばあいは特に目錄學の利用という新しい方法が考えられ、また、餘人の追隨を許されない精緻な徹底ぶりがあった。そのすばらしい成果は、『論語』や『老子』などの校定本として、あまねく知られている。そしてその具體的な方法論は『論語の研究』の初めに詳しくのべられている。『論語』の校定本ができあがる經過を追いながら、先生の校勘學をふりかえってみよう。

岩波文庫本『論語』の仕事を決心されたとき、先生はまず國內の『論語』の寫本で善本といわれるものがどれほどあるかを調べられ、中について宮內省圖書寮の嘉曆鈔本と東洋文庫の正和鈔本とに注目して、その本文校訂にまず從事された。阮元の仕事をのりこえ、そして日本人としての利點を發揮するには、日本の古鈔本を利用するのが第一と

考えられたのである。しかし先生はその校訂をすすめるかたわら、また他の善本を求めて檢討を加えているうちに、一つの事實を確かめられた、それは嘉曆鈔本も正和鈔本もその本文の異同には似たところがあり、それは兩者が共に明經博士清原敎隆の校訂本の流れをうけているためで、津藩の有造館本もまたこれらと同じ系統であるが、要するにわが國に傳わる『論語』の善本はその源を溯ると清原家から出ているということであった。從って、わが國の鈔本をたがいに比べてみてもさして大きな異同はみられない。異同がはげしいのはこれらの鈔本と中國傳來の版本とを比べたばあいのことである。そこで、清家本の定本と中國版本の祖本とを得てそれを對校したならば、最善のテクストが得られるはずだというのが、先生の考えであった。清家本については、その證本が幕末の模刻ではあるが古い面目を傳えて北野學堂から出ている。先生はそれを底本とすることに決められた。問題は中國の方であるが、その祖本を求めるうえで目錄學が利用されることになった。

一般に中國での本の種顏と版本の數はおびただしいものであるが、それだけにそれを整理した目錄解題の類もまた少なくない。『論語』について、昔から今までのその版本をすべて手もとに集めるなどということはもちろん不可能であるが、そうした目錄類を利用すれば個々の版本の性格もあるていどまで明らかになるわけである。先生はそれを巧みに操作されて多くのテクストの親子關係をはっきりさせ、その傳承の系譜を作って、要するにそれらは唐の開成石經の流れを汲むものだと結論された。校勘は今や最も簡單な形で行なわれる。清家の證本を開成石經で對校することを主軸とするのである。岩波文庫本『論語』の本文はこうして定められた。

さて、この經過をふりかえってみると、そこに先生の校勘學の特色はよく表わされている。山井にしても阮元にしても、さらにその後の一般の校勘家もそうであるが、ただ異本を集めて比べあわせるだけであった。今日でも、甚だしいばあいはただ數の多いのを誇りとして、さまざまな異本をかき集めることに腐心する校勘家もある。先生の校勘はそれとは違っていた。もちろんそうした異本をさがし求める努力の必要なことは否定すべくもない。中國留學中に

老子の碑文を訪ねて拓本を集められたことは上に述べたが、國内では各地の圖書館や藏書家を訪ねて先生は善本の發見に努められた。中國の版本とは違ったわが書鈔本の優秀性を宣揚した先生の功績は大きい。しかし、それよりも大切なのは、それらのすべてを等價値にみるのではなくて、それぞれのテクストの性質を見きわめて校勘の資料としての價値の輕重を判定することであった。校勘の資料は「多きを貴ばず、精なるを尊ぶ」というわけで、精善な資料をよりすぐってこそ精善な定本が得られるのである。そして、その精善な資料を得るための方法がここにはっきりと示されたのであった。

先生は『老子』の本文校定においてもこの方法をとられる。先生の校定された『老子』には二種類あるが、それはなんのためであったか。二種類というのは改造社から出た『老子の研究』中のものと、岩波文庫の譯注本のテクストとであって、兩者の本文にはかなりの違いがある。しかし、それは、後から出たものが舊作の誤りを訂したもので、從って舊作は新作と比べると無價値だ、というようなものではなかった。同じ『老子』の本文でも、實は一方は魏の王弼が注釋を加えた原本の復活をめざしており、地方は河上公注本の復原を意圖したもので、それぞれに意義を持つものであった。『論語』のばあいにその傳本の二つの系統が大別できたように、『老子』の傳本については、王弼注本と河上公注本とそして唐の玄宗皇帝の御注との三つの系統がある。このうち玄宗御注は當時に建てられた石經などもあって、その原形は比較的分かりやすいが、前の二者はそうでない。

河上公本には敦煌から出たものやわが國での古鈔本などが幾種類もあってまだ手かがりも得られるが、最も古い形を傳えているはずの王弼本については、善い傳本に乏しく、將に困難が大きい。

ふつうなら、そうした困難の大きい王弼本などにはこだわらずに、要するに古い時代の寫本や版本などを集めていきなり原本『老子』の本文を校定しようとするのであろうが、武内先生はまずそれぞれのテクストを王弼本は王弼本、河上公本は河上公本として復原したうえで、さてそれらの三系統の祖本を校勘して最も古い形での『老子』の原

本を得ようとされたのであった。岩波文庫本と改造社版との二つの『老子』が、ともに先生の勞作として價値が高いのは、この意味においてのことである。そして、また同時にこの意味において、それらはさらに止揚されて最も古い形を導びき出すための礎石でもある。先生の意圖としては、こののち御注本を校定したうえで三者の校勘へと仕事を進められるはずであった。

武內校勘學のすぐれた特色はほぼ理解されたであろうと思う。實際の校勘技術のその優秀さについてはここではふれないが、多くのすぐれた成果はそれを物語って餘りがあるであろう。とはいえ、先生の學問はもとより精善な校定本を作ることだけで終わるものではない。校定本を作ることはそれ自體で一つの完結性を持つ重要な仕事に違いない。しかし、それは哲學ないし思想史學としての分野からみれば部分的な基礎作業にすぎない。基礎作業であるからにはそれは必須のことであるが、しかし基礎はやはり基礎であって、駕籠かきはついに駕籠の中の人ではない。しかも基礎的な仕事としてはなお他にもう一つの重要なことがあった。すべての古典研究に必要な基礎的研究として、校勘學によって正確なテクストを作ることの他に先生が指摘したものは、原典の批判を行なうことであった。

校勘が單に異本を比べあわせてその相違點を指摘するだけに止まるなら何の問題もない。その相違のどちらが正しいかを判定するところから問題が起こるのみであるが、異文の有無に關係なく本文の誤りを發見して訂正するということになると、問題は一層複雜である。原典批判ということは、すでにそこから始まっているといってもよいであろう。先生の王弼本『老子』の校定は、王弼本の善い傳本が少ないという制約のために、特に王弼の注文を參考したり、本文の押韻の關係を考えたり、思想內容の檢討を行なったりしながら、批判的修正を加えてできあがったものである。そこにはかなりのていどまで原典批判の方法が併用されているのである。しかし、先生のいう原典批判がどういうものであるかということは、『論語の研究』において極めてはっきりしている。それは原典の內容を批判的に吟味することによってその成立の事情を考え、その原典の資料としての性格を確定することであった。『論語の研究』

はそこにこそ重點をおいたものである。

『論語』についてのそうした原典批判は、すでに伊藤仁齋や崔東壁によってもすぐれた研究が行なわれていた。仁齋は『論語』二十篇のうち前半の上論十篇が古く後半の下論十篇は後次の續集であろうとしたが、崔東壁も同じ考えでさらに下論中でも最後の五篇を疑わしいとした。武内先生の研究はそれらをわけたものであるが、また内藤湖南博士の『爾雅の新研究』や『易疑』に示された原典批判の方法から多くを學ばれたことであろう。しかし、先生のばあいにはこれらの先人と違った新しい方法が加味された、それは『論語』という書物の來歴を考えることによってその原初の形にさかのぼるという獨特の方法を併用することであった。『論語』という名稱がはっきり出てくるのは漢代のことで、それ以前には「傳に曰わく」といった形で引用されているという事實からすれば、この書物が今日の『論語』として定着する以前にはどういう形で傳わっていたか、そしてまたそのことがこの書物の資料としての性格にどのような關係を持っているかということは、當然問題にすべきことであった。

先生の研究は、このために後漢の『論衡』の記載に注目する。誤字滿紙というべき記載は、先生の讀解によって古い『論語』として齊魯二篇本と河間七篇との二種類があったことを明らかにした。そこで、漢代に壁中から發見された古論語の篇次では第一學而の次に第十鄉黨がおかれており、その二篇でまとまった一つの『論語』とみられるという事實をそれにひき合わせて、この二篇こそが齊魯二篇本であろうと考え、上論十篇のうちこの二篇と子罕篇とを除いた七篇が河間七篇本であろうと考え、さらに下論十篇については、季氏、陽貨、微子の三篇は異質なもので、これを除いた七篇がまた一つのまとまりを持った『論語』であるとした。こうして分類されたそれぞれについてみると、河間七篇本が最も素朴で曾子・孟子派の傳えた語錄とみられるのに對して、下論の七篇は子貢を中心として齋に傳えられたやや新しい資料であり、齊魯二篇本は上の兩者を折衷してできたものだと考えられた。この結論はその後の學界でそのまま受けいれられたわけでは決してない。しかし、從來一つのまとまりにおいて受け取られていた『論語』

が、その成立の事情からすると幾つかの段階があり、それに應じて資料としての性格にも分別のあることが、ひろく認識されるようになった。そして、何よりも貴重なことは、ここにはっきりと示された原典批判の方法論である。和辻哲郎・西田幾多郎の兩博士らが賞讃されたのも、まさにその點であった。ここでは、『論語』の內容についてその文章やことばを吟味するといういわば內面的な批判にとどまらず、それがどういう傳承のしかたをしてきたかという外的な事情を他の資料について探索している。齊魯二篇本とか河間七篇本というのがそれであり、また古論語の篇次をとりあげているのもそれである。そこにはまた目錄學の應用も看取できるであろう。

目錄學を應用した文獻批判としては、先生の『莊子』研究が最もはっきりしたものである。今日に傳わる『莊子』三十三篇の本文は、晉の郭象が刪定したものであるが、それは果たしてそれ以前の古い『莊子』とどういう關係にあるか。『漢書』藝文志の著錄では『莊子』は五十二篇とあって、すでにここに食い違いがある。先生は『經典釋文』叙錄の記述を吟味しながら、內篇七・外篇二八・雜篇一四・解說三の計五十二篇から成る漢以來の舊樣式のものと、內篇七・外篇二〇の計二十七篇から成る晉代の刪定本と、さらにその刪定本にもとずきながら舊式本を參酌して增補を加えた郭象三十三篇本という推移を明らかにしたうえで、さてそれらの內容の相互關係を考えられた。もちろん郭象本以外は亡んでしまって存在しないわけであるから、當時の斷片的な引用を集めてそれらの面目を考えるよりしかたがない。例えば、惠施篇という今日に無い篇名が當時にみられるが、今日の天下篇はその前半だけでまとまっていてその後半では惠施ら一派の論說が集められており、それこそもとの惠施篇ではなかったかと考える。そうした考證が重ねられて、今日の郭象本の資料としての性格が結論づけられたのであった。武內學の本領ともいうべき中心は、實にこの原典批判の方法にあったといってよいであろう。

さて、先生はこのようにテキストの校定と原典批判という基礎學の面で畫期的な足跡を殘されたが、先生の業績はなおこれだけには止まらなかった。武內學の成果をただ基礎學の分野に限って、先生のことを一般の文獻學者と同一

視する人々もあるが、それは大きな誤りである。先生自らが原典批判までを古典研究の基礎的研究だと述べているように、それを基礎だとする自覺は、當然にもその基礎のうえに築かれるべきものを豫想したところから生まれたものである。古典を正しく讀み、その原典の資料的性格を明らかにすることは、それによってその時代の思想狀況を科學的實證的に明らかにするためであった。ここに原典批判の方法を利用した思想史研究というべきものがひらかれた。『易と中庸の研究』は『易』と『中庸』との原典批判を行ないながら、その基礎のうえにたって、それぞれの書物の成立の段階が思想發展の系譜を示しており、しかも兩者の發展段階には密接な相互關係があることを明らかにしたものである。『中庸』のなかで、過不及のない兩端の中という概念が宇宙人生をつらぬく根本理法としての誠の哲學へと發展しているのと對應して、『易傳』においては三つの發展段階があり、卜筮の書から中正の德を目ざす倫理目標が立てられ、やがて誠の絶對的立場を追求するようになった趣きが、關連的に論證されているのである。そもそもさきにみた原典批判の方法の中にもすでに思想の發展推移についての考察はふくまれていた。思想內容について考慮をしない單なる形式だけの考察では、決してすぐれた原典批判にはならない。從って、その意味では原典批判の方法と思想史研究の方法とは常に協調關係になくてはならないわけである。ただ研究の立場をどちらに重點をおいてとるかによって考異のあるのは當然であるが、『易と中庸の研究』は思想の歷史的展開を明らかにすることをはっきりと目標にしたものである。この意味で、それは『論語の研究』よりは方法論的にはまた一歩を進めたものであったと思われる。

先生の思想史研究者としての手腕はこのように到るところでみられるが、それが遺憾なく發揮されたのはいうまでもなく『支那思想史』の著述である。この書物は、出版されてから三十年をへた今日も、なお新しい意味を失なわない名著として國の內外で評判が高いが、まずそれが哲學史ではなくて思想史という名稱をとっていることを注意すべきである。當時では哲學史というのが一般的であって、思想史という名稱はなお珍しかった。先生があえてこの名を

選んだのは、もちろん著述の内容についてそれだけの新しい意圖があったからであろう。從來の哲學史ではいわゆる列傳式のものが多く、思想家の個人個人をきり離した叙述になっていた。從って一思想家の事蹟や思想體系がわかりやすいという利點はあるが、反面では一つの思想體系の展開の跡とか、全體としての思想の推移發展のありさまなどという、思想自體の歴史的考察には弱いうらみがあった。先生の『支那思想史』にはその缺點を補って眞の思想の歴史にしようとする意圖がはっきりとあらわれている。先生は思想史の全體を上世期(上は諸子時代、下は經學時代)・中世期(三教交渉の時代)・近世期(儒教革新の時代)という三期に分けられる。そしてその章目の數例を示すと、上世では「孔門の二學派」「稷下の學」「論理學の發達」など、中世では「儒教より老莊へ」「老莊より佛教へ」「道教の成立」など、近世では「儒學の新傾向」「佛教の新傾向」「宋學の勃興」「宋學の大成」など、いずれも思想の流れをそのまま流動的にとらえていることが看取される。それは當時としては極めて新しい方法で、以後の中國思想史學の發展に決定的な影響を及ぼしたものであった。

この『支那思想史』の特色としてはなお中國佛教思想の流れをおおはばにとり入れたことがあげられる。中國佛教史の研究は獨自のものとしてすでにすぐれた成果をあげつつあったから、中國哲學の分野ではそれを人まかせにして殆んどふれないのがふつうであった。しかし、印度思想を母胎とはしていても中國の土壤に育って中國固有の思想との接觸から生まれたはずの佛教思想が中國思想史の中にとりこまれないというのは、むしろ不思議なことである。今日では、宋學以後を研究しようとする者が佛教についての知識をかなりのていどまで持たねばならないことは當然の常識となっている。また中國哲學の研究者のあいだからも深い佛教研究者があらわれている。武内先生の『思想史』はそうした風潮をはじめて開いたものといってよいであろう。そして、先生がこうした重要な新方向を開かれたについては、佛門出身者として佛教に關する知識が豊かであられたということも考えられようが、やはり何といっても、思想史というものに對する認識のしかたに、從來とは違った新鮮なものがあったことが、その最大の理由であったと

思う。先生の思想史上における貢獻は、今や一層明白になったことであろう。

中國哲學ないし思想史學の研究は、新しい中國の學者たちの活動ともあいまって、近年とみにその方法論について活潑な展開を見せている。誼卿先生の學問に對する今日のわが學界の評價は、決して低いものとは思わないが、古典研究に必須の基礎的研究とその原典批判をふまえてそれと結びついた思想史研究法とは、さらにもっとひろく學ばれて然るべきものであろう。